Title	来館者構成からみた町並み再現展示の観覧行動の比較 ： 大阪市立住まいのミュージアムを対象として
Author	増田, 亜樹 / 碓田, 智子 / 谷, 直樹
Citation	生活科学研究誌. 10 巻, p.39-50.
Issue Date	2012-03
ISSN	1348-6926
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	『生活科学研究誌』編集委員会

生活科学研究誌・Vol. 10（2011）《居住環境分野》

来館者構成からみた町並み再現展示の観覧行動の比較
－大阪市立住まいのミュージアムを対象として－

増田　亜樹[*1]、碓田　智子[*2]、谷　直樹[*3]

[*1] 大阪人間科学大学人間科学部（大阪市立大学大学院生活科学研究科　後期博士課程）
[*2] 大阪教育大学教育学部
[*3] 大阪市立大学大学院生活科学研究科

A Comparative Study on the Visitor Behavior in a Reproduced Townscape Exhibit Based on Visitor Type
A Case Study of the Osaka Museum of Housing and Living

Aki MASUDA[*1]、Tomoko USUDA[*2] and Naoki TANI[*3]

*[*1] Faculty of Human Science, Osaka University of Human Science*
(Graduate School of Human Life Science, Osaka City University)
*[*2] Faculty of Education, Osaka Kyoiku University*
*[*3] Osaka City University*

Summary

This paper examines visitor behavior at the Osaka Museum of Housing and Living, which has reproduced a full-scale townscape from the Edo era. We observed and recorded the visitors' behaviors as they viewed the exhibit, and we also asked visitors to fill out questionnaires after they left the exhibit. We sampled 102 visitors' behaviors from October to December 2007. Data were classified according to group size and type of group in which the visitors viewed the exhibit. Visitors arriving by themselves were found to be less enthusiastic about viewing the exhibit, and their viewing time was shorter than that of groups consisting of multiple adults or both adults and children. Groups consisting of both adults and children spent the longest time viewing the exhibit among the three types of groups, and they had positive, diverse attitudes towards the exhibit. Groups consisting of multiple adults had the highest scores for understanding the exhibit.

Keywords： 公立歴史博物館、町並み、情景再現展示、観覧行動、来館者構成
Public museum of history、*Townscape*、*Reproduced life display*、*Visitor's behavior*、*Visitor's types*

Ⅰ　はじめに

1．歴史博物館における情景再現展示

全国には約 5,800 館の博物館（美術館、科学館、植物園、水族館などを含む）が設置されているが、その 6 割近く、約 3,300 館を占めるのが歴史博物館[注1)]である。歴史博物館の常設展示は、通史的に展示するもの、歴史や美術、民俗に分けて展示するもの、特定のテーマを取り上げて展示するものがみられる。展示手法は、ケースの中に資料を展示し、解説パネルを掲示するのが一般的である。しかし近年は、民家などの建物や町並みを実物大に再現した中に、道具類や人形を配置して当時の生活の様子を再現する展示が増えている。そこで本研究では、

① 民家や町並みを実物大に再現した展示[注2)]
② 道具類や人形によって、当時の暮らしや生業の様子を具体的に再現した展示

の両者を満たすものを情景再現展示と定義する。

筆者らは、これまでに全国の公立歴史博物館の現地調査を行い[注3)]、58 館における調査時の常設展示から 73 件の情景再現展示を確認した。情景再現展示には、1 棟の建物に限って再現するものと複数の建物や街路によって町並みを再現するものがあるが、本研究では、町並みを再現する情景再現展示（以下、町並み再現展示）を取り上げることにする。この展示は、文字解説が最小限に抑えられている点で、これまでの展示とは性質を異にしている。特に町並み再現展示では、定まった観覧動線がなく、来館者は自由に見学することができる。そのため、来館者の関心や特性によって観覧行動や観覧する展示資料が異なると考えられる。

2．先行研究と本研究の目的

博物館の常設展示を対象に観覧行動を考察した先行研究では、展示計画の立場から、展示を順番に観覧することで、来館者が体系的に展示を理解できることに視点をおいた研究がなされてきた[1)]。また、民家展示における観覧行動に関する江水・大原による先行研究がある。これは、常設展示室に再現された民家展示における観覧行動を分析したもので、来館者が民家展示を空間的に把握する行為を空間把握行動とし、行動発生とその要因について分析している[2)]。さらに、野外博物館の民家展示についても同様に、来館者の行動特性を分析し、特に民家の室内に上がる空間体験について論じている[3)]。しかし、複数の建物や街路からなる町並み再現展示に着目して、来館者がどのような観覧行動をとるかを詳細に分析した研究はない。

町並み再現展示は、町並み全体が空間体験の場になり、多様な観覧行動を想定することができる。本研究では、町並み再現展示の事例として大阪市立住まいのミュージアム（以下、住まいのミュージアム）を取り上げる。そして、来館者の年齢層や同伴者の違いによる観覧行動を分析することで、文字解説の掲示がなく、自由な見学を特色とする町並み再現展示における観覧の特徴を考察することが本研究の目的である[注4)]。

Ⅱ　研究の対象と調査方法

1．住まいのミュージアムの情景再現展示

住まいのミュージアムは、「大阪の都市居住に関する歴史と文化」をテーマに、「知的な情報を遊び心で読み解く」ことをコンセプトとして、2001 年に開館した、住まいとその文化に関する博物館である[注5)]。当館は、大阪市立住まい情報センターの 8 階から 10 階にあり、そのうち 9 階展示室では江戸時代の大坂三郷の町並みが実物大で再現されている。この町並みは、江戸時代の水帳や水帳絵図をもとに想定復元され、江戸時代の町空間の特徴を再現した展示である。

各建物の配置と 1 階平面を図 1 に示した。展示室は、木戸門（図面左下）を入ると大通りがあり、その両側に町家が並ぶ。大通りの左側には建具屋・小間物屋・唐物屋・呉服屋・しもたや（仕舞屋）、右側には風呂屋・人形屋・本屋・町会所・薬屋がある。また、町会所と薬屋の間の路地の奥に祠と裏長屋、共同井戸と共同便所がある。人形屋・本屋・町会所・薬屋は、通り土間を持つ町家である。通り土間は、大通りから裏の前栽まで通り抜けることができ、裏の木戸を抜けると奥には裏長屋があり、大通りと裏長屋を行き来する観覧通路の役割も果たしている。ただし、通り土間には暖簾がかかり、前栽は塀で囲われているため、はじめて観覧する場合、通り土間が裏長屋と繋がっていると判断するのは難しい。人形屋は店の奥がミュージアムショップ[注6)]で、裏側からもショップに入り易いよう、通り土間の幅いっぱいに開口が開けられている。

また、大通りでは町家の店先（店の間と呼ぶ）に並ぶ

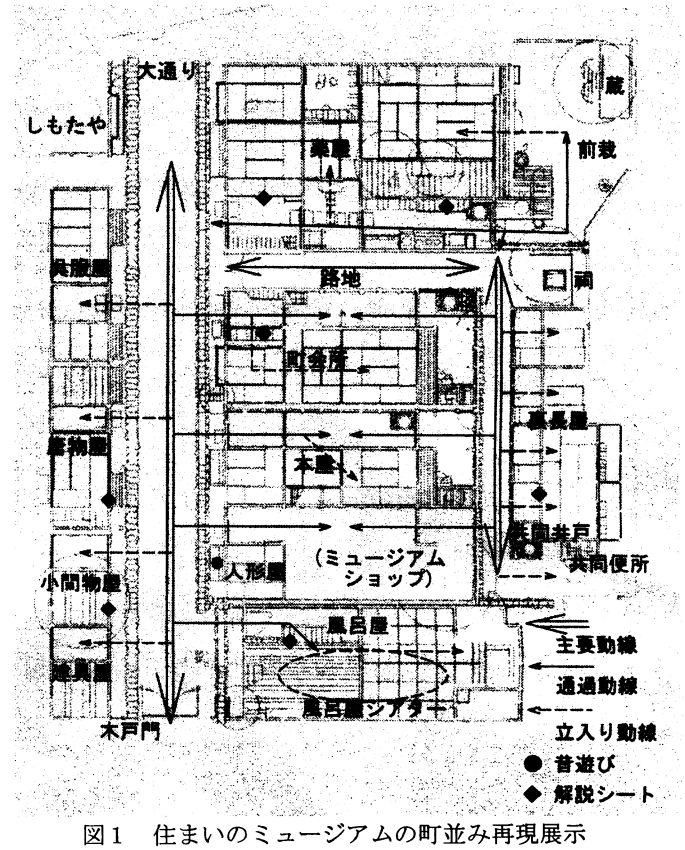


図 1　住まいのミュージアムの町並み再現展示

商品に触れたり、床机に腰掛けたり、昔の遊び道具で遊ぶことができる。さらに、音と光によって、夜明けと昼間の賑わい、雷と夕立、夕焼け、月の出の一日の移り変わりが60分間で演出されている（現在は45分[注7)]）。その他、町家では、店の間以外の室内に上がることができる。

他にも、来館者の理解をサポートするために、シアター、解説シート、ガイドの解説がある。木戸門の右手にある風呂屋は、内部がシアターになっていて、江戸時代の大坂三郷の町並みや当時の暮らしを、約20分の映像で紹介している。建物の名称や構造、当時の暮らしに関する解説シートが展示室内の7箇所に配置され、自由に持ちかえることができる。また、展示室ではボランティアの町家衆やアテンダントが来館者の質問に答えたり、昔の遊び道具の使い方を教えたりしてくれる。さらに、建物や町家の暮らしを説明するガイドの解説である「町家ツアー」が行われている。その他、展示解説用のイヤフォンも有料で貸し出されている。

2．調査対象及び方法

本研究では、町並み再現展示における観覧内容を把握するために、観覧行動調査とアンケート調査をそれぞれ行った。

観覧行動調査は、町並み見学における来館者の行動経路と行動内容を追跡調査するものである。また、立ち止まって観覧したり、展示資料に触れたりする行為の場所と時間も記録した。これらの記録は、調査対象者1名に対して調査員1名がつき、目視によって行った。

アンケート調査は、観覧を終えた調査対象者に、来館理由、観覧内容、観覧後の印象評価、来館者属性を質問用紙に記入してもらう方法で行った。

住まいのミュージアムの町並み再現展示は、4月末から9月初めが天神祭の様子を再現した「夏祭りの飾り」、9月中旬から翌年の4月上旬が商いの町の様子を再現した「商家の賑わい」（写真1）の2期で展示替えされる。本研究では、「商家の賑わい」期間の2007年10月11日から12月9日にかけて合計14日間[注8)]に調査を実施した。

写真1　「商家の賑わい」展示の際の大通りの様子

調査対象者は、調査日に来館し、調査内容に承諾が得られた者である。複数名で来館した場合、そのうち1名を調査対象者とした。観覧行動調査および、アンケート調査はいずれも102例である。

Ⅲ　調査対象者の特性

図2は、調査対象者の年齢構成を示したものである。調査対象者は、40代が23.5%で最も多く、30代から50代が全体の半数以上（56.8%）を占めている。一方、10代[注9)]（5.9%）、20代（8.8%）が少ない。住まいのミュージアムでは、本研究の調査とは別に独自に来館者の年齢層を調査している（図2の下段）。それぞれの年齢層が異なるのは、本研究では中学生以下を調査対象者に含めなかったことと、対象者の年齢ができるだけ偏らないように考慮したためである。

図3は、来館人数と同伴者の関係を示したものである。2人で来館するのは“夫婦”、“友人”、3人以上になると“親子”が中心である。そこで、調査対象者を【大人ひとり】(35例)、2人を中心とする【大人どうし】(41例)、3人以上に多い【大人と子ども】(26例)に大別し、以下、この分類を中心に検討する。

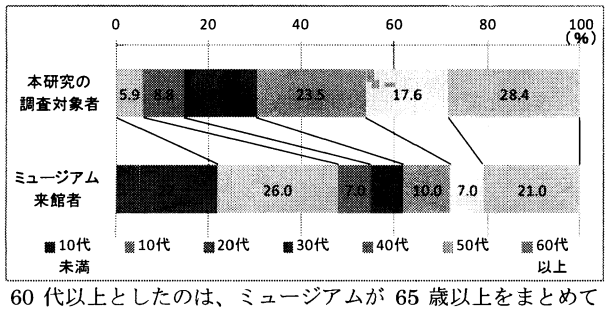
図4から図6は、分類した来館者構成別に性別、年齢層、来館回数をそれぞれ示したものである。性別をみると、【大人ひとり】は男性（60.0%）、他は女性の比率が高い。年齢層では、【大人ひとり】は50代以上（62.9%）、【大人と子ども】の大人は30代から40代（84.6%）の比率が高い。【大人どうし】は年齢層に大きな偏りがみられない。来館回数は、いずれも「はじめて」が多く、複数回の来館者は【大人ひとり】が28.6%で、他よりやや多い。

以上から、【大人ひとり】は50代以上、【大人と子ども】の大人は30代、40代が中心で、【大人どうし】には来館者構成の顕著な傾向がみられない。

Ⅳ　来館者の観覧行動

1．観覧行動の概要

観覧行動調査で得られた内容を整理し、1分ごとの行



60 代以上としたのは、ミュージアムが 65 歳以上をまとめて数えているためである。筆者の調査では、60 代が 15.7%、70 代以上が 12.7%である。

図２　調査対象者とミュージアム来館者の年齢構成

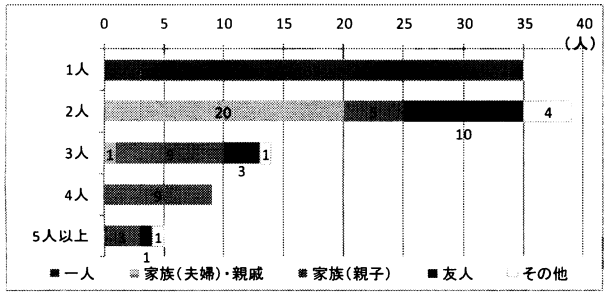


図３　来館人数と同伴者の関係

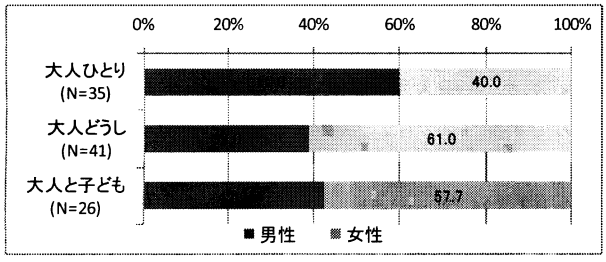


図４　来館者構成別にみた性別

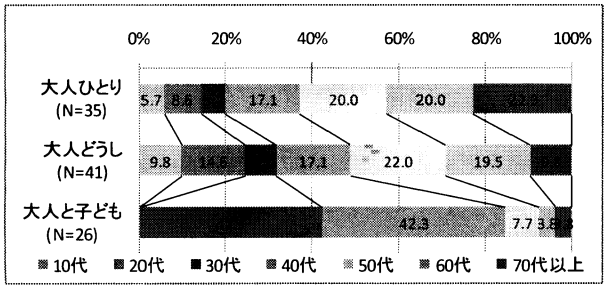


図５　来館者構成別にみた年齢層

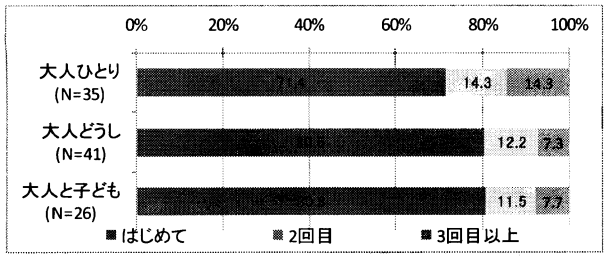


図６　来館者構成別にみた来館回数

動経路、滞留行為の場所と時間がわかる図を CAD で作成した。図７はその一例である。図中の矢印は、調査対象者の行動経路を示したもので、記号の内容は滞留行為を示したものである。滞留時間が１分以上の場合、その時間も示した。この事例の調査対象者は、１人で来館した 50 代の男性で、観覧時間は 27 分である。観覧内容をみると、大通りは、風呂屋から町会所までの間が繰り返し見学され、観覧経路の中心である。そして、大通りから風呂屋、本屋、町会所など６箇所の町家に立ち入っている。町家の内部では、通り土間が観覧の中心で、室内に上がるのは風呂屋に限られる。風呂屋ではシアターを観覧している。路地は、１度通過するだけで滞留していない。また、裏長屋も立ち止まって観覧しておらず、観覧の中心は大通りであった。

図８は、来館者構成別に平均観覧時間を示したものである。全体の平均観覧時間は 28.2 分である。【大人ひと

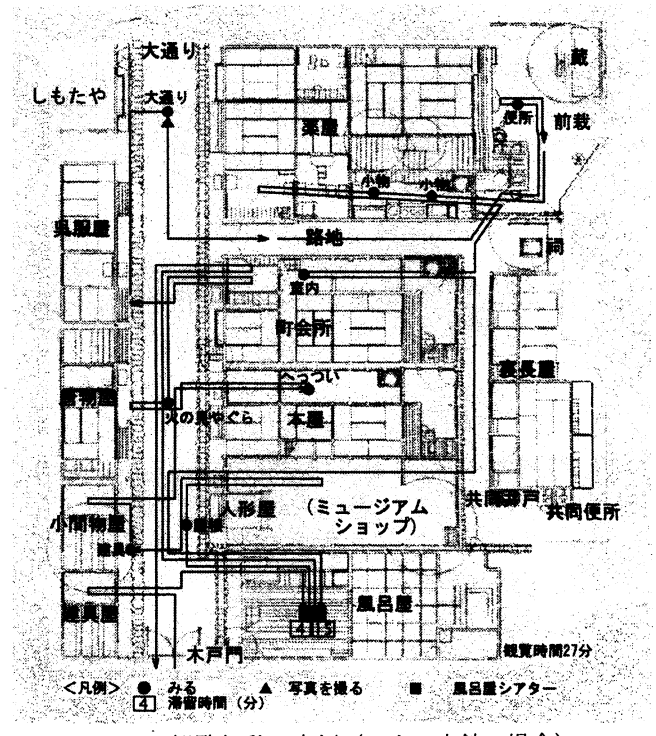


図７　観覧行動の事例（一人で来館の場合）

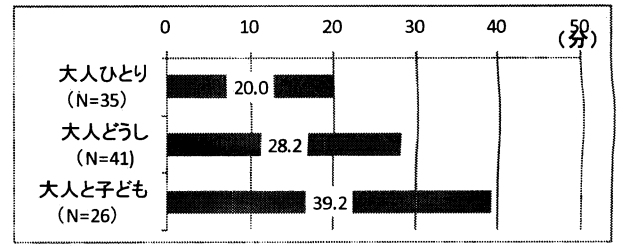


図８　来館者構成別にみた平均観覧時間

り】は、20.0 分で平均観覧時間よりも 10 分近く短い。【大人どうし】は、28.2 分で平均観覧時間と変わらない。【大人と子ども】は、39.2 分で平均観覧時間よりも 10 分程度長く、【大人ひとり】の約２倍の観覧時間である。このことから、同伴者の存在、さらにはその同伴者に子どもがいることが観覧時間を増加させる要因と考えられる。

２．観覧場所の検討

（１）領域の設定と通過回数について

調査対象者が町並み再現展示の中で、どこを観覧しているのかを捉えるために、町並みを領域ごとに区分し（図９、左上）、領域ごとに通過回数の平均を求めた。

領域の区分は以下の通りである。住まいのミュージアムの町並み再現展示には、通りと町家があるため、通りの道路空間、町家の土間空間と室内空間に領域を分けた。道路空間は、大通りの右側にある町家の間口幅、裏長屋の前の路地が裏長屋１戸ずつの間口幅でさらに領域を分けた。町会所と薬屋の間の路地は、路地の奥行きの中央で２つに領域を分けた。また、土間空間は、店の間に接する土間と居室に接する土間、室内空間は、各室ごとに領域を分けた。以上によって、町並みを 59 の領域に分けた。

通過回数は、各領域における通過のし方によって、展示資料を何回観覧することになるのかを基にして、領域を通過すると１回、通過せずに折り返すと２回と計測した。ただし、大通り左側にある町家の土間（1～4）と裏長屋の土間（52・54・56・58）は、通り抜けられず、立ち入るだけで必ず折り返す場所である。そのため、ここに立ち入った場合は１回とした。

先に示した図７を例にして具体的に説明すると、通過回数１回とは、町会所と薬屋の間の路地（図９の 31・32（以下、同じ））を通過した場合で、行動経路は大通り側から入り、薬屋の前栽（51）へ抜けている。通過回数２回とは、薬屋の通り土間（33～35）を通過する場合で、前栽の勝手口から台所土間（35）に入り、中庭（34）を経て店土間（33）に至り、ここで引き返して、再び中庭、台所土間を経由して前栽に出ている。

（２）各領域の平均通過回数

図９は、平均通過回数を来館者構成別に示したものである。全体的にみると、来館者構成に関わらず観覧の中心は大通りである。大通りのうち特に多いのが、風呂屋から本屋の前（５・６・７）で、【大人と子ども】は平均通過回数が 4.1～4.8 回である。この数は、１人当たり２往復以上したことを意味している。この領域は、町並み再現展示の入退場時に必ず通過するため、さらに１往復していることになる。重複通過した事例をみると、風呂屋シアターを観るために観覧途中に戻ってくることが主な要因である。また、１往復を意味する２回以上の通過は、大通り全体にみられ、大通りの町並みを繰り返し観覧していることが分かる。

一方、大通り左側の町家の土間と裏長屋の土間は、0.2～0.6 回で、多い箇所でも調査対象者の半数しか立ち入っていない。先に示した路地も通過回数が少ないが、これらはいずれも、立ち入る、あるいは通過しなくても見通せるためと考えられる。

このことから、町並み再現展示では、大通りは繰り返し観覧するが、建物の中に何度も立ち入ることは少なく、また、向こうが見通せる場所や、内部を覗くことができる場所にはあまり立ち入らないという特徴が窺える。

【大人と子ども】は、２回以上のくり返し通過している領域が最も多いもので、大通り・裏長屋の前の路地・薬屋の前栽・風呂屋の土間などが挙げられる。また、通り土間の通過回数をみると、どの町家の通り土間も【大人ひとり】・【大人どうし】よりも多い。一方、大通り左側にある町家や裏長屋に立ち入る回数は、【大人ひとり】・【大人どうし】とほとんど変わりない。このことから、【大人と子ども】は、大通り・路地・通り土間を中心に、他のグループよりも繰り返し見学している。

なお、【大人ひとり】は、大通りの他に裏長屋の前の路地、風呂屋の土間の通過回数が１往復以上である２回を数えた。【大人どうし】は、２回以上の通過回数を数える領域が大通り・風呂屋・路地の一部に限られた。

（３）室内に上がる行為

住まいのミュージアムの町家のうち、風呂屋・本屋・町会所・薬屋・裏長屋の５箇所は室内に自由に上がることができる。図 10 は、室内に上がった割合を町家ごとに示したものである。風呂屋は、来館者の６割が上がり、５箇所の中で最も割合が高い。これは、風呂屋でシアターを上映していることが理由として考えられる。ただし、【大人と子ども】は、９割近くが風呂屋の室内に上がるが、【大人どうし】が 58.5%、【大人ひとり】が 42.9%であることから、同伴の子どもがシアターの鑑賞を促していると考えられる。その他の町家をみると、薬屋以外はほとんどが室内に上がっていない。特に【大人ひとり】は、室内に上がるのが風呂屋と薬屋に限られる。【大人ひとり】の室内に上がる割合が特に低い理由を探るために、【大人ひとり】を 20 代以下の青年層、30 代から 50 代の壮年層、60 代以上の高齢層に分け、室内に上がる割合を比較した。その結果、20 代以下が 60.0%、30 代か

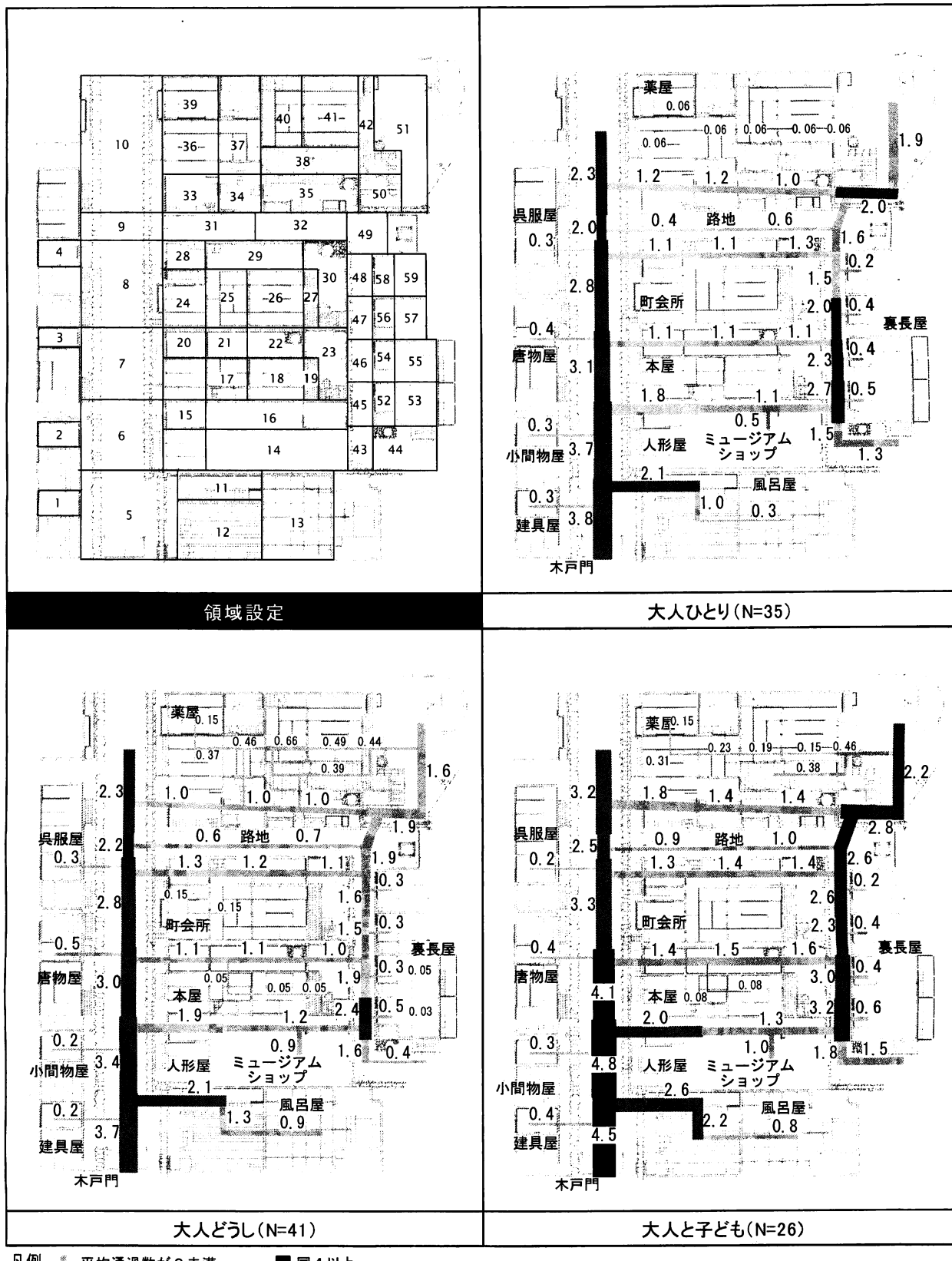


図９　領域の設定と各領域の平均通過回数

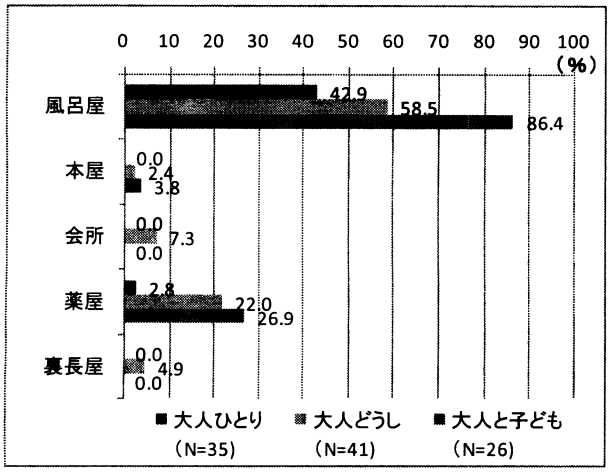


図 10　建物別にみた室内に上がる割合

ら 50 代が 73.3%であるのに対し、60 代以上が 13.3%で特に少ない。【大人ひとり】は、60 歳以上が 42.9%（図 5 参照)を占めており、高齢層が多いことが室内に上がる割合が低いことにつながっていると考えられる。

3．滞留行為

調査対象者が、観覧行動調査中に立ち止まり、観覧や体験する行為を滞留行為とする。図 11 は、内容別に滞留行為をした人の割合と、そのうち 1 分以上滞留した人の割合を示したものである。滞留行為には、「立ち止まってじっくりみる」・「展示資料に触れる」といった体験する行為と、「館のスタッフと話をする」・「解説シートをみる」といった解説を受ける行為がみられる。このうち、「立ち止まってじっくりみる」は、ほとんどの調査対象者にみられる滞留行為である。また、「展示資料に触れる」も多くの調査対象者にみられる滞留行為である。しかし、これらの行為を行った者のうち、1 分以上の滞留がみられた割合は低い。一方、「昔のおもちゃで遊ぶ」・「床几や床などに腰掛ける」・「館のスタッフと話をする」・「シアターをみる」は、滞留行為の割合が先の 2 つに比べて低いが、1 分以上滞留する割合が高いものである。

【大人と子ども】は、「立ち止まってじっくりみる」（100%）と「展示資料に触れる」（80.8%）の割合が高く、滞留行為の中心である。さらに、滞留時間が長い「昔のおもちゃで遊ぶ」(61.5%)、「床几や床などに腰掛ける」（42.3%)、「館のスタッフと話をする」（53.8%)、「シアターをみる」（73.1%）の割合が高く、観覧時間が長くなる要因となった。一方、【大人ひとり】は、「立ち止まってじっくりみる」（94.3%)、「シアターをみる」（45.7%）が上位を占める。また、「解説シートをみる」の割合が同伴者を伴う者よりも多い。一方、「展示資料に触れる」（37.1%)、「昔のおもちゃで遊ぶ」（8.6%）などの割合が低く、全体を通じて滞留行為の内容が“みる”ことを中心にしている。

表 1 は、1 分以上の滞留した場所とその割合を示したものである。全体的に大通りと風呂屋の割合が高い。大通りでは昔の遊び、風呂屋ではシアターが滞留の要因である。【大人どうし】・【大人と子ども】は、大通りでの滞留行為の発生割合が高く、【大人と子ども】は 100%を超えている（123.1%)。一方、観覧時間の短い【大人ひとり】は、滞留した割合が最も高い風呂屋でも 37.1%にとどまり、全体を通して場所ごとの滞留した割合が低い。その中で、裏長屋は、他の来館者構成よりも割合が高く（22.9%)、風呂屋に次いで大通りよりも割合が高い場所である。このことから、大通りは複数名で来た来館者にとって楽しむ場であるが、1 人で来館した者には楽しむ場とはならず、むしろ風呂屋、裏長屋のほうが滞留しやすくなっている。

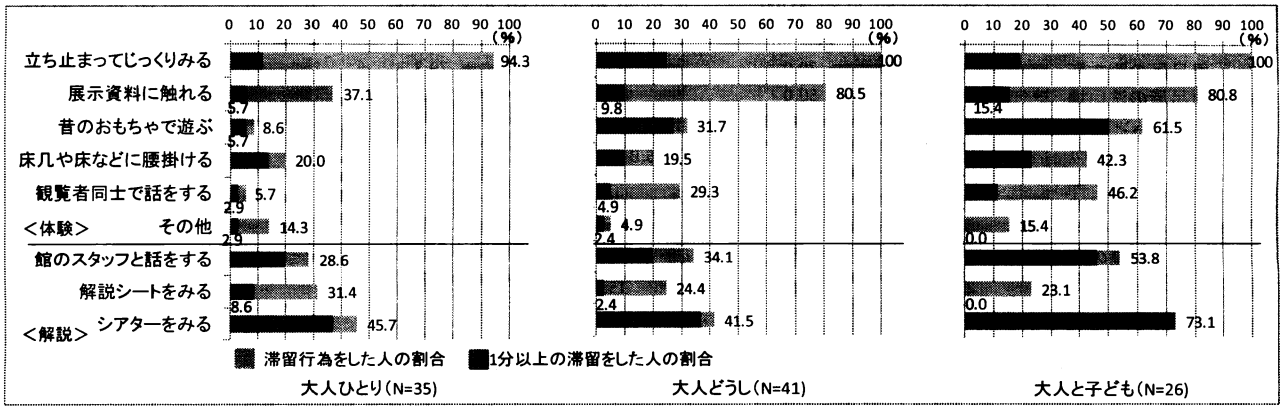


図 11　来館者構成別にみた滞留行為の割合と、そのうち 1 分以上滞留した割合

表１　１分以上の滞留場所とその割合

	大通り	大通り左側町家	風呂屋	大通り右側町家	薬屋	路地	裏長屋
大人ひとり（N=35）	20.0	0.0	37.1	5.8	2.9	2.9	22.9
大人どうし（N=41）	78.0	2.4	48.8	0.0	4.9	0.0	12.2
大人と子ども（N=26）	123.1	0.0	84.6	19.2	23.1	3.8	11.5

注）調査対象者によって滞留箇所が複数あるため、来館者構成ごとの割合の合計が100%を超える場合がある。

V　印象に残った観覧場所と展示資料

1．観覧した場所と印象に残った場所

観覧後の印象評価を得るために、展示室内にある代表的な場所を10箇所挙げ、調査対象者に観覧した場所と、そのうち最も印象に残った場所をそれぞれ選択してもらった。来館者構成別にみる（図 12）と、「裏長屋の井戸や便所」は、３グループ共に観覧した割合が９割前後、最も印象に残った場所として選択した割合が４割前後を占め、どちらも全ての箇所の中で最も高い割合となっている。しかし、実際の観覧行動では、「裏長屋の井戸や便所」を観覧した割合が８割程度である。この差の理由として、井戸や便所は他の町家にもあるため、それらと混同した可能性がある。その他、風呂屋と薬屋は、他の町家よりも観覧した割合が高く、町家の中で印象に残る場所である。一方、木戸門は、【大人ひとり】が42.9%、【大人と子ども】が50.0%で、観覧の最初と最後に必ず目に触れるはずが、半数程度しか認識されていない。

【大人どうし】は、代表的な場所として挙げた 10 箇所のうち７箇所で観覧した割合が８割以上を占める。その内訳は、風呂屋（脱衣場と洗い場）・会所・路地・薬屋（蔵と台所）・裏長屋の井戸や便所であることから、展示室をひと通り観覧している。一方、【大人と子ども】は、観覧時間が最も長いが、観覧した割合が８割以上を占める場所は４箇所にとどまった。また、観覧時間が最も短い【大人ひとり】は、７箇所の観覧した割合が半数程度であった。このことから、観覧時間が長いこととひと通り観覧することとは、相関関係がないことが明らかになった。

年齢層別にみる（図 13）と、20 代以下は、全ての場

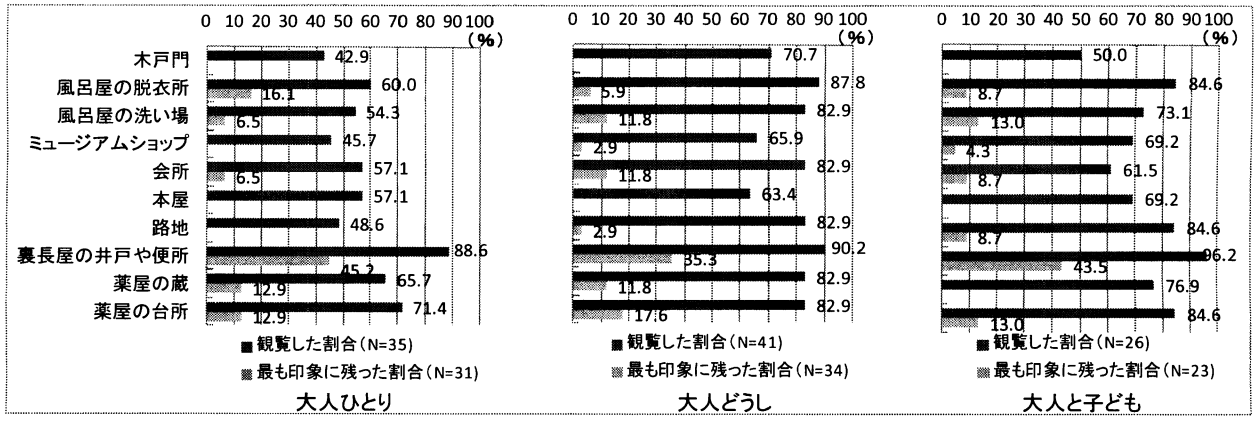


図 12　来館者構成別にみた観覧した場所と、そのうち最も印象に残った場所

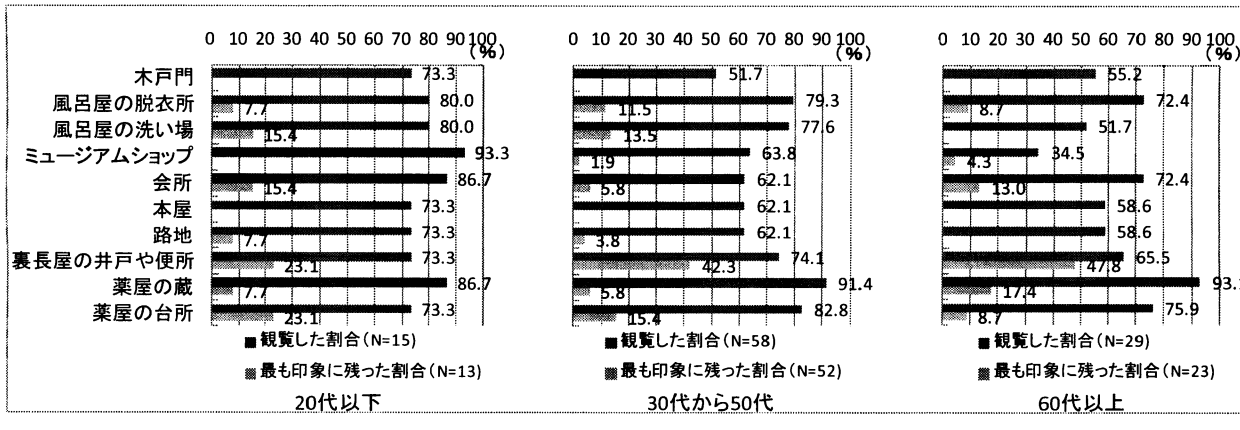


図 13　年齢層別にみた観覧した場所と、そのうち最も印象に残った場所

所において観覧した割合が７割以上を占め、町並み再現展示をひと通り観覧している。一方、30 代から 50 代と 60 代以上は、観覧した割合が７割以上を占める場所がどちらも半数以下である。また、風呂屋と薬屋は、観覧した割合が最も高い場所で、観覧の中心であること、「裏長屋の井戸や便所」は、最も印象に残った場所に挙げた割合が半数近くを占めることが共通している。

２．観覧した展示資料について

同様に、代表的な展示資料を８項目挙げ、調査対象者に観覧した展示資料と、そのうち最も印象に残った展示資料をそれぞれ選択してもらった。

来館者構成別にみる（図 14）と、「かまどや鍋・釜など」、「昔の生活道具」の２項目は、どちらも観覧した割合が８割以上で、各グループにおいて観覧した割合が最も高いことから、暮らしに関係する展示資料への関心が高い。一方、「座敷に飾られた屏風」・「風呂屋の浴槽」・「火の見やぐら」の３項目は、室内に上がって観覧するものや、意識しなければ見逃してしまうもので、全項目の中で割合が低い傾向にある。【大人ひとり】は、３グループの中で観覧割合が最も低い展示資料が６箇所あり、他のグループに比べると展示資料の観覧が少ない。ただし、観覧した展示資料の傾向には、来館者構成による目立った違いがない。

年齢層別にみる（図 15）と、観覧場所と同様に、20 代以下は、「座敷に飾られた屏風」を除く全ての項目を観覧した割合が７割以上を占め、観覧した場所、展示資料それぞれをひと通り観覧している。一方、60 代以上は、「昔の生活道具」と「かまどや鍋・釜など」を除く全ての項目の観覧割合が７割に満たない。その中で、「風呂屋の浴槽」は 20.7%で特に低い。

以上から、観覧した展示資料は、観覧場所と同様に年齢層による違いがみられた。

３．観覧後の印象評価

最後に、観覧後の感想を 10 項目挙げ、調査対象者に「そう思う」・「ややそう思う」・「あまりそう思わない」・「そう思わない」の４段階で評価してもらった。どの項目についても「そう思う」と「ややそう思う」の肯定的な評価が多いため、図には「そう思う」と「ややそう思

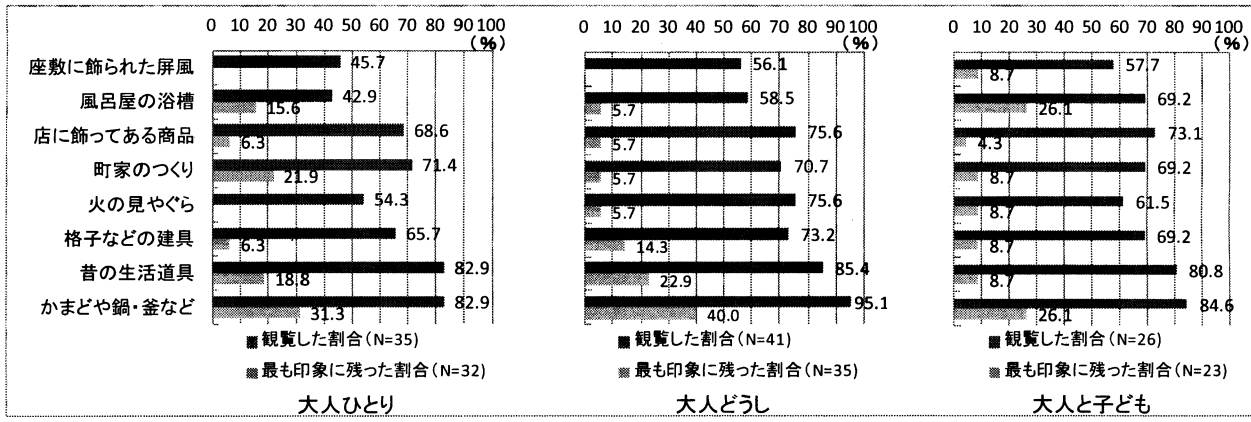


図 14　来館者構成別にみた観覧した展示資料と、そのうち最も印象に残った展示資料

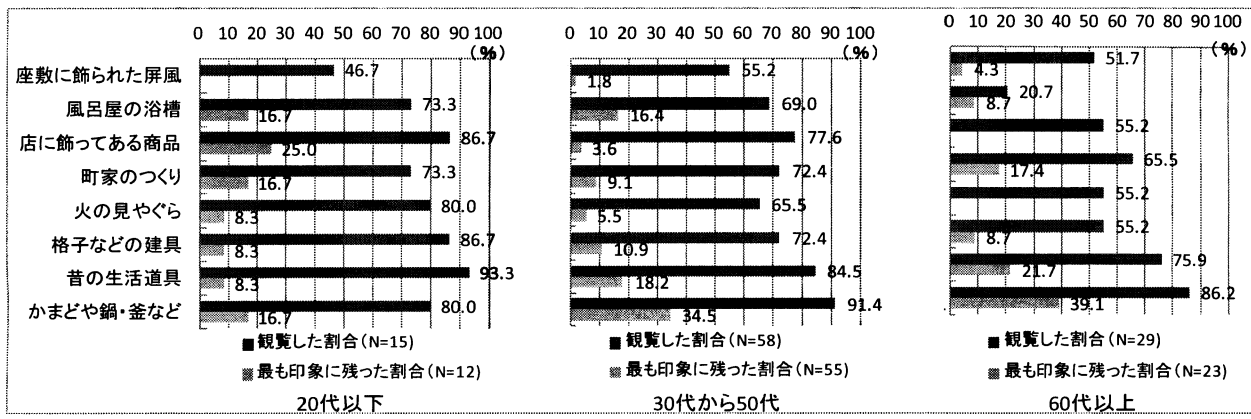


図 15　年齢層別にみた観覧した展示資料と、そのうち最も印象に残った展示資料

う」の回答割合のみを示した。

来館者構成別にみる（図 16）と、「戸惑ったり、迷ったりすることなく見学できた」は、「そう思う」と「ややそう思う」の回答割合（以下、肯定評価）がいずれも９割以上を占め、来館者は観覧動線がなくても町並み再現展示を迷うことなく観覧できていることがわかる。また、「古い町並みの中にいるのが楽しかった」・「タイムスリップしたみたいに感じた」・「江戸時代の生活を体感し味わえた」の雰囲気を評価する３項目は、肯定評価がいずれも８割以上で、来館者は全体的に町並み再現展示のもつ雰囲気を楽しんでいる。

【大人と子ども】は、「室内に上がることが出来てよかった」（92.3%）と「展示物を自由に触れられてよかった」（88.5%）の体験に関わる２項目の評価が、他のグループに比べて２割以上高く、参加体験の仕掛けも評価されている。

また、年齢層別にみる（図 17）と、20 代以下は、「昔の生活を思い出し懐かしかった」以外の項目で肯定評価が８割以上あり、雰囲気、参加体験ともに評価が高いことがわかる。他の年齢層については、町並み再現展示の雰囲気を評価する３項目の評価が高い。一方、60 代以上の層は、体験に関わる２項目の評価が他の年齢層に比べ特に低いが、これは室内に上がったり、展示資料に触れたりする行動が少ないという観覧行動調査の結果と対応している。

Ⅵ　まとめ

町並み再現展示を持つ大阪市立住まいのミュージアムにおいて、来館者の観覧行動と観覧評価を検討した結果、以下の知見が得られた。

1）観覧行動の調査結果から、文字解説の掲示や観覧動線の提示がなく、自由に観覧する町並み再現展示において、来館者は町並み全体を観覧することが明らかになった。観覧者の評価でも、「戸惑ったり、迷ったりすることなく見学できた」との回答が９割を超えた。

2）来館者構成を、【大人ひとり】・【大人どうし】・【大人と子ども】に分類して分析した結果、平均観覧時間（28 分）に対し、【大人と子ども】は、10 分近く観覧時間が長い。また、【大人と子ども】は、展示室を繰

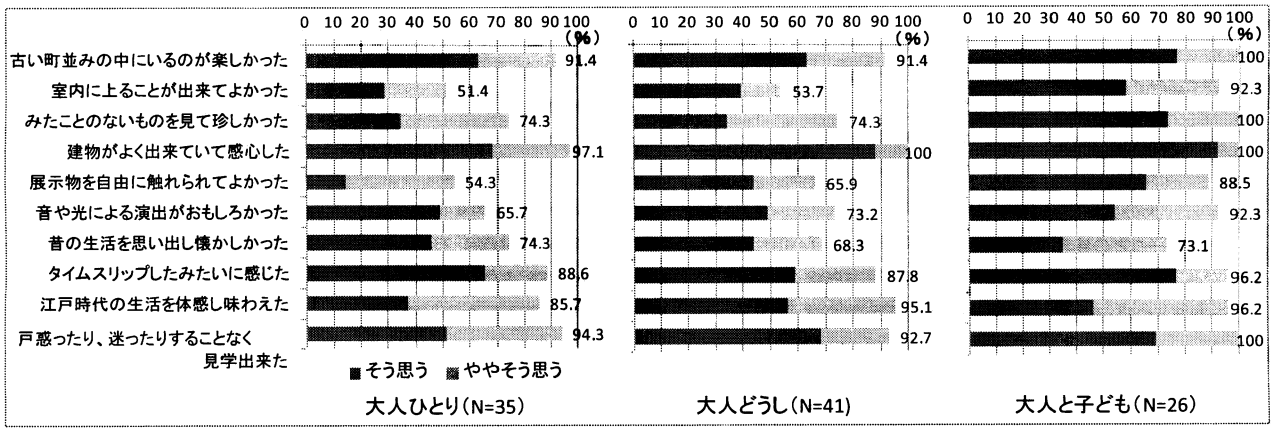


図 16　来館者構成別にみた観覧評価

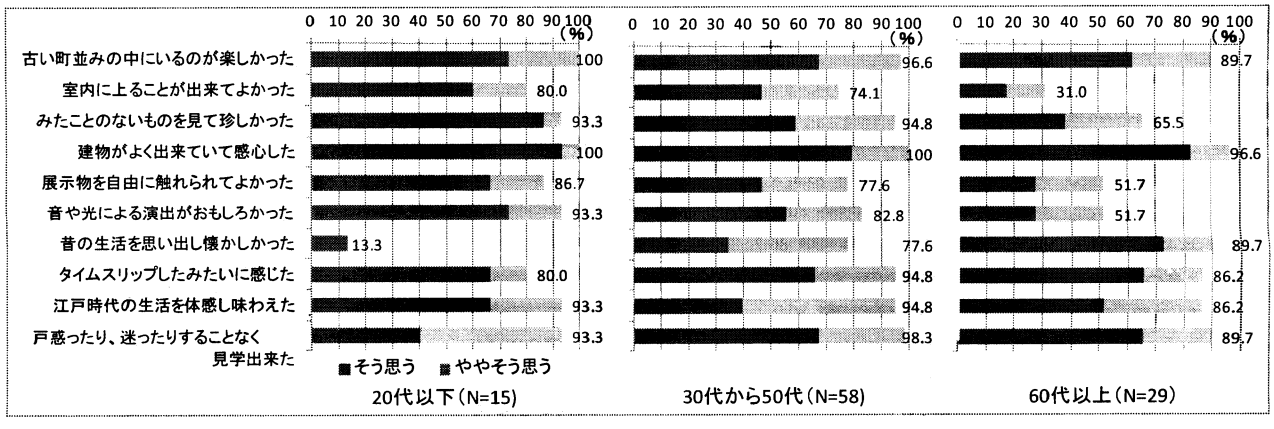


図 17　年齢層別にみた観覧評価

り返し観覧し、時間の長い滞留行為がみられ、室内に上がる割合も高いなど、観覧行動が多様であった。これらの行為は、【大人どうし】で来館する場合よりもいずれも高く、子どもの存在が観覧行動を促していることが示された。観覧後の評価においても、【大人と子ども】が最も高く評価した。

3）一方、【大人ひとり】は、観覧時間が平均より10分短く、1箇所に滞留して観覧する行為が少なく、室内に上がる割合が低い。観覧した展示資料も、他の来館者構成よりも少ないことが明らかになった。

4）年齢層別にみると、ひと通り見学する20代以下の青年層は、町並み再現展示の雰囲気を楽しむほか、参加体験を評価する傾向にあり、全般的に評価が高い。一方、60代以上の高齢層は、体験に関する評価が低いが、町並み再現展示の雰囲気を楽しんでいた。

以上から、文字解説の掲示がなく、来館者が自由に観覧する町並み再現展示においては、大人単独の場合は観覧行動が狭まり、子どもを伴うと観覧行動が広がるなど、来館者の構成が観覧行動に影響することが明らかになった。町並み再現展示では、来館者の構成による観覧行動の違いを踏まえつつ、多様な観覧行動を促す展示方法や学習支援のあり方の検討が必要と考えられる。

謝辞

本研究は、2007～2009年度大阪市立大学G-COE特別研究費によって実施した。また、本研究の調査においては、当時、大阪市立大学谷直樹研究室に在籍していた三瀬寛子氏、江川奈生氏、山中裕子氏の協力を得たことを付記しておく。

参考文献

1）博物館の常設展示室における観覧行動調査を行ったもののうち、代表的なものとして以下が挙げられる。
①野村東太他「博物館の展示・解説が来館者行為に与える影響 - 博物館に関する建築計画的研究Ｖ - 」（『日本建築学会計画系論文報告集』第445号、pp.73-81、1993）
②加野隆司・松本啓俊「展示方式と鑑賞行動からみた博物館の建築計画に関する研究－展示レイアウトおよび展示室の形態に関する研究－」（『日本建築学会計画系論文報告集』第454号、pp.55-64、1993）
2）江水是仁・大原一興「ミュージアムにおける民家の室内展示に対する来館者の観覧行動に関する研究－日本科学未来館・環境共生型住宅の事例－」（『日本建築学会計画系論文集』第600号、pp.41-48、2006）
3）江水是仁・大原一興「屋外民家展示施設における来園者の観覧行動に関する研究－江戸東京たてもの園「八王子千人同心組頭の家」の事例より－」（『日本建築学会計画系論文集』第609号、pp.33-39、2006）

注

注1）2008年度の文部科学省社会教育調査では、博物館総数（博物館及び博物館類似施設）は5,775館で、そのうち歴史博物館は3,327館（57.6%）である。これに歴史展示のある総合博物館（429館）を加えると、およそ3,800館になる。

注2）再現した展示には、移築した展示も含めている。

注3）現地調査は、2003年9月から2009年1月までである。

注4）屋内展示室型の歴史博物館で、展示室全体を使い、複数の建物と街路からなる規模の大きな町並み再現型の情景再現展示を持つのは深川江戸資料館と大阪市立住まいのミュージアムの2館のみである。

注5）大阪市立住まいのミュージアム編『住まいのかたち暮らしのならい－大阪市立住まいのミュージアム図録』平凡社、2001

注6）2008年10月以降、ミュージアムショップは、8階休憩コーナー横に移動され、ワークショップや着物試着コーナーとして活用されている。

注7）2009年4月以降、一日の移り変わりの演出は、60分から45分に変更された。

注8）調査の具体的な日程は、2007年10月11日（木）、21日（日）、25日（木）、27日（土）、11月8日（木）、9日（金）、10日（土）、11日（日）、18日（日）、22日（木）、24日（土）、29日（木）、12月1日（土）、9日（日）、である。調査時期には、9階展示室で小学生向けの体験学習が実施されていたため、調査は、体験学習が行われない木曜日、土曜日、日曜日を中心に実施した。

注9）本調査では、アンケート調査内容の性格上、中学生以下の来館者は対象から外した。そのため、本研究における10代とは高校生以上を指す。

来館者構成からみた町並み再現展示の観覧行動の比較
－大阪市立住まいのミュージアムを対象として－

増田　亜樹、碓田　智子、谷　直樹

要旨： 近年の歴史博物館では、民家などの建物や町並みの中に生活道具や人形を配し、当時の生活の様子を再現する展示（情景再現展示）が増えている。特に町並み型の情景再現展示は展示解説が最小限に抑えられ、自由に見学する点を特色とする。本研究は、江戸時代の町並みを実物大で再現した町並み再現展

示をもつ大阪市立住まいのミュージアムを対象に、来館者の観覧行動と観覧評価を詳細に調査し、その特徴を考察した。102名の調査結果から、自由見学であっても、来館者は町並み全体を観覧することが明らかになった。また、来館者構成を「大人ひとり」、「大人どうし」、「大人と子ども」に分類して分析した結果、「大人と子ども」は観覧時間が最も長く、展示空間を何度も行き来し、建物の室内に上がるなど観覧行為が多様であった。一方、「大人ひとり」は観覧時間が短く、観覧行為が少なかった。文字解説が掲示されず、自由に見学する情景再現展示においては、同伴者や子どもの有無が観覧行動に影響することが示された。